

13世紀ラスール朝宮廷の食材 —— インド洋交易との関わりを中心に ——

馬 場 多 聞

は じ め に

13世紀初頭より200年以上にわたってイエメンを支配したラスール朝(626/1228-858/1454)は、インド洋交易による財政収入をもとに隆盛を極めた。このことは、13世紀の旅行家マルコ・ポーロが、アデン'Adanの سلطانすなわちラスール朝 Sultanを指して、「彼が世界で最も富裕な王者の一人でありうるのは、まさに右に述べた理由、すなわちその国にやってくる商人に賦課した重税のおかげなのである」[ポーロ II: 252-253]と述べていることからもうかがえる。ラスール朝下イエメンはインド洋交易において重要な位置を占めており、西はモロッコから東は中国へ至る諸地域の産物が、支配下のアデン港を中継し、往来していたのである [Serjeant 1974; Smith 1995, 1996; al-Shamrookh 1996; Margariti 2007; Vallet 2006, 2010; 家島 2006; 栗山 2008b, 2012]。当然のことながら、これらの産物はラスール朝下を素通りするだけでなく、イエメンにおいても輸入、使用されたものと考えられる。大航海時代の到来までまだ一世紀以上を待たなければならないが、この頃にはインド洋を舞台とした交易が既に盛んに行われており、ラスール朝宮廷も遠方からの外来品の恩恵を受けていたことだろう。しかしながら先行研究は、海上交易の形態や携わっていた商人、貿易ルート、アデン港における税関業務に着目するばかりで、交易品の実際の用途やラスール朝宮廷へ与えた影響に対しては関心を払っていない。ラスール朝の歴史をインド洋交易とのつながりの中でとらえようとした場合、こうした諸点の検討は必須の作業といえよう。

以上の観点よりラスール朝関連史料に目を通すと、インド洋周縁部より運ばれた産物のうち、特に香料・香辛料類を中心とした食材が宮廷で用いられたことを示す記事がまみられる。これらの宮廷食材に関する記事を検討することで、インド洋交易が陸域の人びとの生活に及ぼした作用を知ることができるものと考えている。また、宮廷を彩った食材を網羅的に精査し、その傾向や産地の多彩性をみることによって、宮廷食文化の一端を詳らかにすることとなるだろう。

そこで本稿では、ラスール朝宮廷において用いられた食材を、インド洋交易との関わりに着目した上で描き出すことを目的とする。より具体的には、最近になって刊行された『壮麗なるムザッファルの時代におけるイエメンの統治と法律そして諸慣習に関する知識の光

Nūr al-Ma'ārif fi Nuẓum wa Qawānīn wa A'rāf al-Yaman fī al-'Ahd al-Muzaffarī al-Wārifī (以下、『知識の光』と略記)中の宮廷への食材供給に関わる記事(以下、「宮廷への食材供給記録」と総称する)を考察の中心に据え、宮廷食材の多様性と、その獲得先が広域にわたっていたことを示す。この史料は、主としてスルタン・ムザッファル al-Muzaffar Yūsuf (r. 647/1249-694/1295)の治世期(特に1290-1295年)およびスルタン・アシュラフ al-Ashraf 'Umar (r. 694/1295-696/1296)の治世期に作成された文書の写しの集成であり、最終編纂年代はアシュラフ治世期以降であるとみられる¹⁾。したがって本稿では、13世紀のラスール朝宮廷の食材状況を検討することとなる。

既に筆者は上記史料を用いて、ラスール朝宮廷への食材供給元の分析を行っている[馬場2011]。その結果、13世紀ラスール朝下イエメンにおいては、紅海沿岸のティハマ Tihāma と南部山岳地域という自然環境が大きく異なる二地域が様々な特産物を産出していたこと、またアデン港がインド洋周縁部の産物を集散する機能をもっていたことが明らかとなった。本稿では、宮廷食材を一覧にして提示し、その傾向を探るとともに、インド洋交易による輸入品の確定を行う。このふたつの研究によって、往時の宮廷の食文化やイエメンにおける経済活動の一端がより具体性を帯びて描かれるばかりでなく、従前の研究では欠けていた点、すなわち海上を行き交った交易品が実際に用いられていたことが実証的に示されることとなるだろう。

I 「宮廷への食材供給記録」と食材の傾向

1 「宮廷への食材供給記録」

『知識の光』中には、「宮廷への食材供給記録」とみなせる記事は約60点みられる[Nūr I : 127, 393, 407-408, 525-559, 571-581; Nūr II : 1-24, 70-101, 119-150]²⁾。以下はその一例で、スルタンがある年のラマダーン月に、タイズ Ta'izz³⁾所在の迎賓館で催した宴席にお

1) 翻刻者ジャーズィム Muḥammad 'Abd al-Raḥīm Jāzīm は、『知識の光』序文において、『知識の光』がムザッファルの治世に作成された行政文書をもとに編纂された史料であると指摘している。しかし記事内容を再検討したところ、アシュラフ治世期以降にしか作成されない記事を四点確認できる[Nūr I : 379-380, 567-570; Nūr II : 6-7, 16-17]。他、同史料の詳細については、Nūr I : alif-zāy; Nūr II : alif-hā'; Vallet 2010: 70-72 を参照。

2) 「宮廷への食材供給記録」は、以下の五種類の記録を総称したものである。すなわち、スルタンの厨房で使用された食材の記録[Nūr I : 534-535, 535-539; Nūr II : 1-2, 8, 21-24, 93-94]、王族や配下への手当て支給ならびに食材分配の記録[Nūr I : 127, 393, 407-408, 525-559, 571-581; Nūr II : 9-17, 88-90, 119-150]、調達命令書関係の記録[Nūr II : 2-7, 12, 18-20, 70-84]、料理の材料記録[Nūr II : 9, 84-88, 90-93, 96-99]、使用人の典範(宮廷食材の詳細への言及を含む)[Nūr II : 95-96, 99-101]から成る。もっとも以上の分類は、記事に書かれた情報をもとに筆者が行ったもので、厳密には区分し難い部分もある。

3) イエメン南部山岳地域に位置し、スルタンの居地として栄えた[Taqwīm : 90-91; Nukhba : 217; Mujāwir : 156-159; Masālik : 152; Mu'jam II : 40; Baṭṭūta II : 107; 家島訳Ⅲ : 128]。

いて、下賜あるいは消費された食材の詳細を記録したものである。「宮廷への食材供給記録」は、多様な行政文書より構成されているため各記事間にいくらかの差異がみられるものの、概ね下記引用のような体裁をとっている。

庇護されたるタイツの城塞の迎賓館における聖なる宴席 (al-sumât al-karîm) のために、高貴にして幸運たる賞賛へ向かうラマダーン月の日々の消費品についての諸紙片 (awrâq)

手当て (râtib) 用に生じたところのもの……(中略)…レンズマメ：1 ザバディー (zabadi), 白砂糖：6 ラトル (ratl), 米：1+1/2 ザバディー, ヒヨコマメ：1/4…(中略)…

砂糖菓子の館用—白砂糖：15, 蜂蜜：15, アーモンド：4 ラトル, ヘイゼルナッツ：4 ラトル, ゴマ油：16 (後略) [Nûr II : 13-16]

このように、まず冒頭に、その記事の内容をあらわす題名ならびに状況説明文が書かれる。次に、記載される食材の用途が示され、その後に個々の食材名や量、価格が列挙されて行く。

この「宮廷への食材供給記録」のうち、最も古い記事は644年/1246-1247年のものであり、最も新しい記事は694年/1294-1295年の状況を記したものであった [Nûr II : 6-7, 11]。したがって「宮廷への食材供給記録」には、13世紀中ごろから末における、宮廷食材の状況が反映されているということができよう。

もっともこれらはその編者すら不明な断片的な記録の集成であって、記録間の相互の連続性も薄い。また、宮廷で使用された食材を網羅的に記載しているというわけではない。しかし、周辺史料との比較を通じて、その記事内容を吟味、検討することで、本稿の目的達成のために十分な情報を提供する史料であると考えられる。

2 宮廷食材の傾向

「宮廷への食材供給記録」記載の食材の種類数は、95点にのぼる。また同記録中にはほかにも、厨房や日常生活で使用されたとみられる用具類や雑貨類に関する記事も含まれる。これらの食材や用具類、雑貨類を、15種類に分類、整理したものが、「表 宮廷食材、用具類、雑貨類一覧」である⁴⁾。

この表をみると明らかなように、ラスール朝宮廷食材の特徴として、多様な香料・香辛料類が使用されていたことがまず挙げられる。種類数の面では、香料・香辛料類が食材全体に

4) 同記録中には、各種料理に関する記事もみられるが、本稿ではその詳しい分析を行わないため、表中に記載していない。小麦粉については、小麦として表中に記載した。デンプンに関しては原材料が不明瞭であるため、「その他(食材)」に分類した。また、厨房やハンマームで用いられたとみられる薪や水、厩舎で使用された飼料やタール (qatrân) も記録されているが、宮廷の食材に着目するという本稿の目的上、分析対象に含めなかった。他、翻刻者ジャーズィムにしてもその解説、同定が難しい産物についても、表中に入れていない。

表 宮廷食材、用具類、雑貨類一覧

[Nür I : 127, 393, 407-408, 525-559, 571-581; Nür II : 1-24, 70-101, 119-150]

分類	イエメンで生産された産物	インド洋交易を通じて獲得された産物
肉類 (6)	羊 (ghanam : 'arabiya, <u>kasaba</u>), ヤギ (mā'iz), 鶏 (dajāj), 鳩 (ḥamām), 牛 (baqar, māshiya), ラクダ (ibil)	バラール羊 (ghanam : barābir)
卵・乳製品類 (7)	凝乳 (qanbaris), 卵 (bayḍ), 混ぜ乳 (qaṭīb), ヨーグルト (laban), <u>ハキーン (ḥaqīn)</u> , 乳 (<u>ḥalīb</u>), チーズ (jubn)	
魚類 (1)	<u>ザイラク魚 (samak zayrāk)</u>	
穀物類 (4)	小麦 (burr : quṣaybi, ḥalbā, 'arabī, wasanī), ソルグム (dhura : bayḍā'), <u>ゴマ (juljān)</u>	米 (urz : kharajī, khāṣṣ, burūjī, hindī, tānshī)
豆類 (6)	レンズマメ ('adas), 黒キャラウエイ (ḥabba al-sawdā'), <u>ルピナス (tirmis)</u> , <u>ソラマメ (fūl)</u> , <u>グリーンピース ('atar)</u>	ヒヨコマメ (ḥummuṣ)
野菜類 (14)	ニンニク (thawm), <u>カボチャ (yiqṭīn)</u> , <u>ナスビ (bādhinjān)</u> , <u>ネギ (baṣal akḥḍar)</u> , <u>タマネギ (baṣal yābis)</u> , <u>ニンジン (jazar)</u> , <u>クルカース (gulqās)</u> , <u>チャルド (silq)</u> , <u>キュウリ (qithā')</u> , <u>パセリ (baqdūnas)</u> , <u>バクル (baql)</u> , <u>カブ (lift)</u> , <u>メロン (baṭṭikh)</u> , <u>青野菜 (buqūlāt, khudra)</u>	
果実類 (4)	<u>ザクロ (ḥabb rummān)</u> , <u>レモン (lim)</u> , <u>バナナ (mawz)</u> , <u>シトロソ (uturu)</u>	
乾燥果実類 (9)	クルミ (jawz), ナツメヤシ (tamr : makkī, thīl, farḍ), タマリンド (ḥumar), アーモンド (lawz), ヘイゼルナッツ (bunduq), <u>ピスタチオ (fustuq)</u> , <u>干シブドウ (zabib)</u>	ナツメヤシ, タマリンド (thamara), <u>ピンロウジ (fūfal)</u>
香料・香辛料類 (30)	コリアンダー (kazbara), <u>ベニバナ ('uṣfur)</u> , <u>ベニバナの種 (qurtum)</u> , <u>カラシ (khardal)</u> , <u>シヨウガ (zanjabīl)</u> , <u>ケシ (khishkhāsh)</u> , <u>タイム (ṣa'tar)</u> , <u>キャラウエイ (karāwayā)</u> , <u>ウイキョウ (shamār)</u> , <u>シユクル (shuqr)</u> , <u>ミント (na'na')</u> , <u>カーズイー (kādhī)</u> , <u>リジュラ (rijla)</u> , <u>フルバの種 (bizar ḥurba)</u>	コシヨウ (filfil), <u>クミン (kammūn)</u> , <u>肉桂 (qirfa)</u> , <u>配合香料 (aṭraf ṭīb)</u> , <u>ウイキョウ (bisbāsa)</u> , <u>マスチック (muṣṭakā)</u> , <u>サフラン (za'farān)</u> , <u>カンシヨウ (sunbul)</u> , <u>クローブ (qurunful)</u> , <u>クマール沈香の葉 (waraq qumāri)</u> , <u>アニス (yansūn)</u> , <u>カルダモン (ḥāl, hayl)</u> , <u>スンマーク (summāq)</u> , <u>メボウキ (rayḥān)</u> , <u>アロエ (ṣabir)</u> , <u>ナツメグ (jawzā')</u>
調味料類 (3)	<u>塩 (milḥ)</u> , <u>酢 (khal)</u> , <u>ムッリー (murri)</u>	
甘味類 (4)	蜂蜜 ('asal : 'uṣqī), <u>砂糖 (sukkar : abyāḍ, aḥmar, muṣaffā)</u> , <u>キターラ (qitāra)</u> , <u>糖蜜 (qand)</u>	モガディシユ砂糖 (sukkar : maqdishī)
油脂類 (6)	ゴマ油 (salīṭ), <u>バター油脂 (samm)</u> , <u>タヒーナ (ṭaḥīna)</u> , <u>タサーキー (tasāqī)</u>	動物性油脂 (wadak), <u>オリーブオイル (zayt)</u> , <u>バター油脂</u>
その他 (1)	<u>デンブン (nashā)</u>	
用具類 (59)	陶磁器 (10), ナツメヤシ製品 (10), 木製品 (5), ガラス製品 (3), 縄類 (5), 石製品 (3), その他 (22)	中国陶磁器 (ṣīni)
雑貨類 (10)	<u>セッケン (ṣābūn)</u> , <u>ロウ (sham')</u> , <u>ランタン (fawānis)</u>	<u>セッケン</u> , <u>ロウ</u> , <u>鉄 (ḥadid)</u> , <u>塩化アンモン石 (nushādir)</u> , <u>アンチモン (rāsikht)</u> , <u>没食子 ('afs)</u> , <u>オカビジキ (ushnān)</u> , <u>麝香 (zabād)</u> , <u>乳香 (lubān)</u>

※ 品目名に付された下線は、「宮廷への食材供給記録」中においてその品目の供給元の確定が難しいことを示す。その場合、農事暦類などの周辺史料によって分類した。

※ 「用具類」については、その記載品目数が多く、しかし個々の品目についての検討を本稿では行わないことから、表が煩雑になるのを防ぐために、主たる原材料やその形状によって種類分けを行った。品目名に続く括弧の中の数字は、その種類数を示す。

占める割合は約 32% となっており、特にコショウやサフラン、クミン、マスタックが史料上に頻出している。

また野菜・果実類に関しては、ラスール朝農事暦類⁵⁾と比較すると、その記載点数が少ないという特徴がみられた。野菜類は、表中に 13 点挙げられているのに対し、ラスール朝農事暦類には 35 点への言及がみられる。果実類については、「宮廷への食材供給記録」に 4 点の記載があるのに対し、農事暦類には 27 点を見つけることができる。このように、「宮廷への食材供給記録」に記録された野菜・果実類は、王朝下で作られる産物のごく一部にすぎないのである。その理由として、以下の三点が想定される。第一は、本稿において青野菜と訳出した *khudra* や *buqūlāt* という単語が、諸々の野菜・果実類を包括している可能性である。実際、ハズラジー *al-Khazrajī* (d. 812/1410) の年代記には、スルタンの息子の割礼を祝うために準備されたものの中に、「様々な青野菜 (*al-buqūl*): ナツメヤシ、レモン、果実のすべて」と記述されている [Uqūd II: 195]。また、「宮廷への食材供給記録中」にも、「チャルドと青野菜 (*silq wa buqūlāt*): チャルド、ミント、パセリ、緑コリアンダー」との記事を見つけることができる [Nūr I: 534]。さらにヴァリスコ D. M. Varisco によれば、スルタン・アシュラフやスルタン・アフダル *al-Afdal al-'Abbās* (r. 721/1321-778/1376) が著した農書では、野菜に関する章 (*buqūl and khadrawāt*) の中に、諸々の野菜類の説明がなされているという [Varisco 1989: 151-152; Varisco 2002: 345-349; Varisco 2010]⁶⁾。第二に、そもそも「宮廷への食材供給記録」が、遠方への調達命令書や、その結果獲得、消費した産物の記録によって主に成り立っているため、近場から供給される野菜・果実類などは記録されにくい傾向にあるということが考えられる [cf. Nūr I: 407-408]。そして第三は、宮廷の食慣習が反映されている可能性である。たとえば豆類についてみると、「宮廷への食材供給記録」(6 点) と農事暦類 (13 点) との間に、種類数の差がみられる。これを、宮廷の食慣習に沿うもののみを取捨選択した結果ととらえることもできよう。

魚類にいたっては、マルーハート (*al-malūhāt*) という料理の材料として、ザイラク魚への言及が一例あるのみで、実際に使用されたことを示す記事はみられない。イブン・アルムジャーウィル *Ibn al-Mujāwir* (d. 690/1291) は、ザビード *Zabīd* 外港のガラーフイカ

5) 本稿でいうラスール朝農事暦類とは、ラスール朝下において著された農事暦ならびに穀物課税簿を指す [Tābsira: Tawqī'āt; Afdal: 25-27, 127-130, 277, 517-519]。農事暦類については、Serjeant 1984; Varisco 1985, 1988, 1989, 1991, 1993, 1994a, 1994b, 2002, 2010 を参照。

6) 「*buqūl and khadrawāt*」については、ヴァリスコの稿にしたがったものである。アラビア語原文中では、アラビア語で「*buqūl wa khadrawāt*」と記載されているものと考えられる。スルタン・アフダルの農書 *Bughya al-Fallāhīn fī al-Ashjār al-Muthmīra wa al-Rayhān* は、イエメン外の農書に加えて、スルタン・アシュラフやスルタン・ムジャーヒド *al-Mujāhid 'Alī* (r. 721/1321-764/1363) の手による農書を引用しているとされる [Varisco 1989: 151-152]。筆者は今回、その要約版である Afdal: 206-211 のみを参照できた。そこでは、「野菜に関していえば (*ammā ai-akhḍar*)」ではじまる記事の中で、20 点の作物が挙げられている。

Ghalāfiqa⁷⁾から様々な魚がザビードへ輸送されていたこと、ティハーマの諸都市やハドドラウト Ḥadramawt において魚食の慣習があったことを報告している [Mujāwir : 86, 90, 99, 243, 265]。さらに、シフル Shihr⁸⁾や東アフリカからは、塩干し魚 (ṣayd māliḥ, mumallah) が海路アデン港へ運ばれていた [Nūr I : 440; Mulakhkhaṣ : 17b]⁹⁾。このような状況にあったにも関わらず、魚類に関する記事がほぼみられない理由としては、上述の野菜・果実類の事情と同様に、生モノであるが故に遠方への供給が不可能であったことがまず念頭に浮かぶ。しかし、海岸部や対岸の東アフリカでは塩干し魚が生産、輸送されており、魚の保存、輸送手段は確保されていたことを考えれば、むしろ、羊肉を好んで食べる宮廷にとって、魚食の慣習が薄かったことが記録不在の主因であろう [Lewicka 2011 : 209-225]。

なお、米や小麦、ナツメヤシについては、他の産物と比べて、その種類名が明記されることが多い。たとえば米であれば、ハラジー (kharajī) やブルージー (burūjī) といったニスバ付きで記録されている。これらは明記こそされていないもの、種類ごとに産地や品質が異なっていたと考えるのが妥当だろう。このことは、「宮廷への食料供給記録」の作成者にとって種類に関する情報が重要であったことを示している。今一步踏み込んで言えば、宮廷の食の嗜好の一端が、ここに垣間みえているのである。

II 宮廷食材とインド洋交易

I 三種類のアデン港課税品目録の検討

本章では、アデン港を通してインド洋周縁部の各地から輸入された宮廷食材¹⁰⁾の詳細とその獲得先の広域性について、アデン港税関で取り扱われた商品の目録との比較をもとに明らかにする。こうした目録については、これまで、13-15世紀に編纂された三種類の史料が知られている。一つ目は、イブン・アルムジャーウィルの地誌中の12世紀の状況を伝える記事であり [Mujāwir : 140-143]、およそ30余点の商品が記録されている。二つ目は、『知識の光』中の複数の記事であり [Nūr I : 409-491]¹¹⁾、近年、ヴァレット E. Vallet や栗

7) ティハーマに位置する港町。ガラーフィカへ続くザビードの西門は、ガラーフィカ門と呼ばれていた [Taqwīm : 89; Simṭ : 249; Mujāwir : 243; Mu'jam III : 148]。

8) ハドドラウトに位置する港町。龍涎香や馬の積出地として栄えた [Taqwīm : 84, 93; Nukhba : 217; Mujāwir : 143, 185; Mu'jam III : 371; 家島 2006 : 568]。

9) 『知識の光』翻刻者のジャーズィムによれば、ṣayd māliḥ は塩漬けの魚肉のことであるという [Nūr I : 440, note. 3267]。

10) ラスール朝は、アラビア半島南部の複数のインド洋交易港を支配下に入れていたが [Mulakhkhaṣ : 17a; 家島 2006 : 319-332, 356]、「宮廷への食料供給記録」中においてアデン港以外の港から宮廷へ食材が供給された形跡はみられない。また、ヒジャーズ al-Hijāz やオマーン 'Umān からの、陸路による供給例もみいだせなかった。

11) 『知識の光』中には、「辞書の文字順による、その所有者の権利をアッラーフが永らえ給うところの、庇護されたるアデン港の足しげき税関における関税」 [Nūr I : 409-460]、「文字順ではな

山によって詳しい検討がなされている [Vallet 2010; 栗山 2012]。そして三つ目は、15世紀にフサイニー al-Husaynī (d. 15. C.) が 815/1412 年に編纂した『アデン港の書記官提要 *Mulakhkhaṣ al-Fiṭan wa al-Albāb wa al-Misbāḥ al-Hudā li al-Kuttāb*』所収の目録で、450 点余りの商品の一覧である [Mulakhkhaṣ: 4a-b, 17b-26a]。

まず、これら三種類のアデン港課税品目録の性質について考えてみよう。シャムルーフは、この三史料をもとに輸出入品と判断した産物を例にとり、それらの産物がイエメンにおいて日常的に輸出入されていたかのように説明している [al-Shamrookh 1996: 238-240]¹²⁾。マルガリティもまた、アデン港の食材状況について、イブン・アルムジャーウィルの「エジプトから到着するもの」の記事に依拠し、「少なくともイブン・アルムジャーウィルの来訪時には、(アデン港の) 基本食材もまた海外から輸入されていた」と述べている [Margariti 2007: 66-67]。しかし、「宮廷への食材供給記録」とこの三史料を比較すると、後者にもとづけば輸出品とみなしうる産物であるにも関わらず、前者にアデン港からの供給事例がみられない産物を 8 点確認できるのである¹³⁾。これらの産物は、アデン港を通じて輸入されていたというよりは、イエメンにおいて生産され、宮廷へ供給されていたとみられる。

したがって、これら三種類のアデン港課税品目録は、あくまでもアデン港において取り扱う機会のあった産物の記録であり、その記述をもとにただちに、当該産物の輸出入が絶えず行われていたかどうかを判断するのは難しい。また何より、アデン港に至った産物の多くは、同港を中継して他港へ輸送されていたと考えるべきである¹⁴⁾。

2 インド洋交易を通じて獲得された産物

表中の「インド洋交易を通じて獲得された産物」には、前述した三種類のアデン港課税品

い、到着品や発送品について行われている慣習である。庇護されたるアデン港の、その所有者の権利をアッラーフが永らえ給うところの、足しげきディーワーンにおける関税 [Nūr I: 461-477], 「インド向けに積み出されるカーリミー商人の商品に課される費用」 [Nūr I: 478], 「エジプト地方から到来する商品」 [Nūr I: 479-484], 「エジプト地方とカーリミー商人へ運ばれる商品に課される費用」 [Nūr I: 485], 「高貴なる門から到来する商品」 [Nūr I: 486-491] の六種類の目録が所収されている。なおこれらの目録に続いて、アデン港税関業務に関する記事が付随している [Nūr I: 492-524]。またほかにも、「エチオピアから運ばれた品、それに課されるもの」 [Nūr I: 362-367] という記事もあるが、これはアデン港に限らない、ラスール朝下の港において取り扱われたエチオピアから輸送された商品の目録とみられる。

12) シャムルーフは、こうした産物がアデン港を中継して東西へ流れていた点についても考慮しているが [al-Shamrookh 1996: 237-238], イエメンとの関連においては本文中で述べたように、輸出入品との断定を急ぐ傾向にある。

13) すなわち、小麦やゴマ、タマリンド (ḥumar), 干しブドウ, ショウガ, 砂糖, 蜂蜜, ゴマ油については、アデン港課税品目録に輸入品として記載される一方で、アデン港以外のイエメンの諸都市から宮廷へ供給されていたことを確認できる。

14) 栗山 2012: 36. アデン港課税品目録に記載された産物が輸出入品かどうかを判断する方法については、栗山 2008 や栗山 2012 に詳しい。

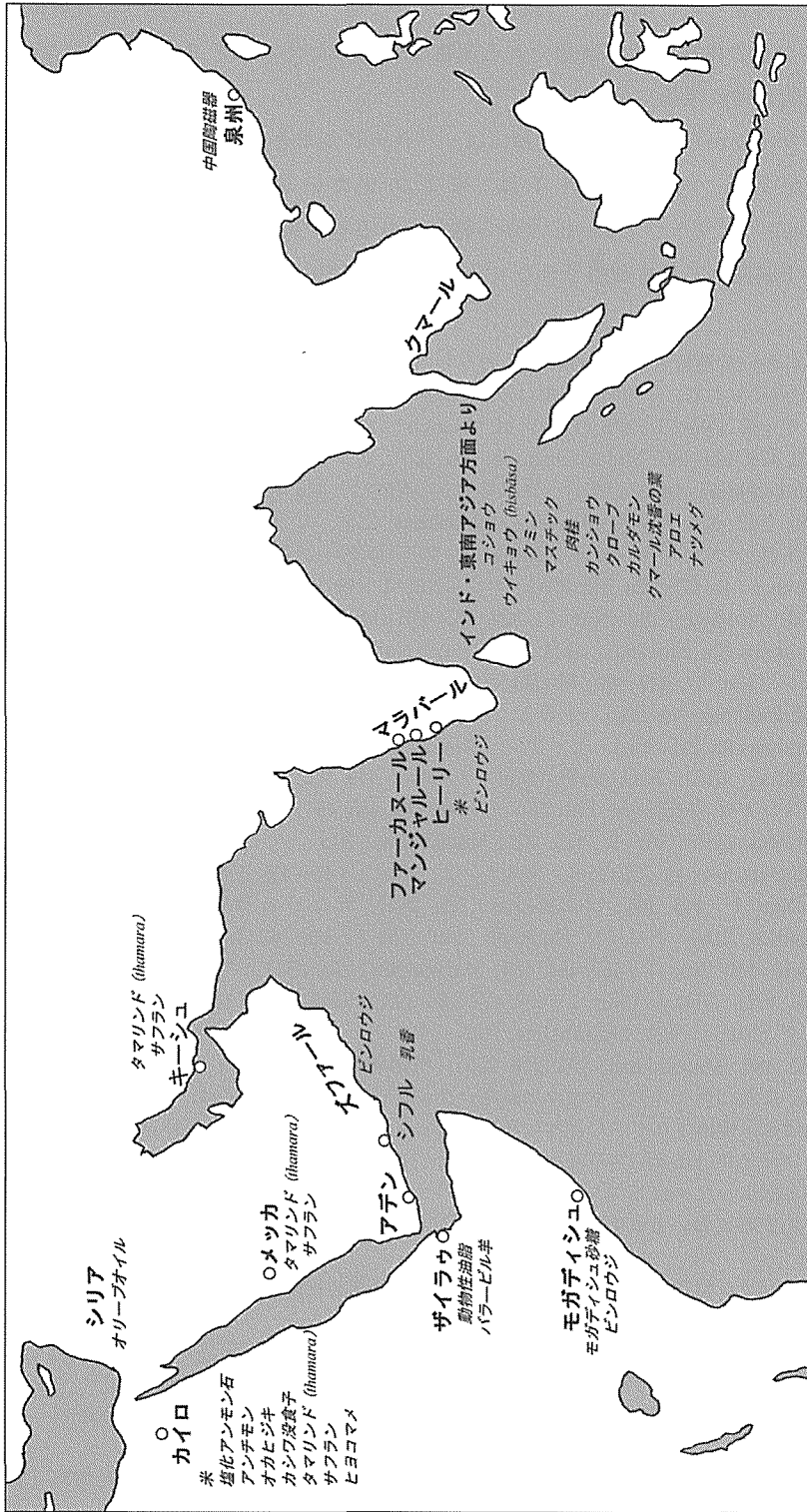


図 インド洋周縁部とラスール朝宮廷食材 [筆者作成]

目録や周辺史料をもとに輸入品と判断することができ、なおかつ「宮廷への食材供給記録」にアデン港からの供給事例を確認できる産物をまとめた¹⁵⁾。以下では、ここに挙げた産物を、その供給元別に確認してみよう。

まず東アフリカから輸入された産物には、バラール羊と、モガディシュ Maqdishu¹⁶⁾からの砂糖がある。バラール羊は、東アフリカのマイト Mayt¹⁷⁾やマルガッワ Marghawwiya¹⁸⁾、ザイラウ Zayla¹⁹⁾から輸入される羊であった。二大祭時には、王族やアミールへの下賜品としても使用された [Nür I : 576-579]。モガディシュからもたされた砂

- 15) 宮廷において消費された各種輸入品のうち、三種類のアデン港課税目録に記録されている産物は31点におよぶ。その記載箇所は以下の通りである。：

バラール羊 [Nür I : 445, cf. 501; cf. Mujāwir : 141; Mulakkkhaṣ : 27a], ナツメヤシ [Nür I : 416, 472, 478, 459, 486; Mulakkkhaṣ : 4a, 17b, 22b], タマリンド (thamara) [Nür I : 417, 473, 478-479; Mulakkkhaṣ : 4a, 22a, 25a], ビンロウジ [Nür I : 446-447, 464, 485; Mulakkkhaṣ : 20b, 米 Mujāwir : 142; Nür I : 429, 476, 485; Mulakkkhaṣ : 21a], ヒヨコマメ [Nür I : 425; Mulakkkhaṣ : 21a], オリーブオイル (zayt) [Mujāwir : 42], バター油脂 [Nür I : 433, 472, 476-477, 483; Mulakkkhaṣ : 4a, 17b, 22a, 25a, 26a], ロウ [Nür I : 436-437, 475-477, 480; Mulakkkhaṣ : 4a, 22a, 25a], 鉄 [Mujāwir : 140; Nür I : 424, 465, 478; Mulakkkhaṣ : 4a, 17a, 21a, 25b, 26b], シロメ [Mulakkkhaṣ 22a, 24b, 26a], 塩化アンモン石 [Nür I : 458-459, 480; Mulakkkhaṣ : 22a, 24b], アンチモン [Nür I : 429, 480; Mulakkkhaṣ : 4a, 22a, 24b], カシワ没食子 [Nür I : 443, 473, 478, 479; Mulakkkhaṣ : 4a, 22a], オカヒジキ [Mujāwir : 142; Nür I : 412, 413, 478, 481, 485, 490; Mulakkkhaṣ : 4a, 22b, 25a], セッケン [Mujāwir : 142], 麝香 [Mujāwir : 142; Nür I : 455, 469; Mulakkkhaṣ : 17a-b, 20a], 乳香 [Nür I : 430, cf. 449, 452, 471-472, 485; Mulakkkhaṣ : 17b, 22b, 25a], コショウ [Mujāwir : 140; Nür I : 446, 464, 485, 491; Mulakkkhaṣ : 17b, 21b, 26a-b], ウイキョウ (bisbāsa) [Nür I : 415, 462; Mulakkkhaṣ : 20b], クミン [Nür I : 451, 472, 478, 483, 486; Mulakkkhaṣ : 4a, 22a, 25a], マスチック [Nür I : 454-455, 478, 485; Mulakkkhaṣ : 4a, 24b], 肉桂 [Nür I : 448, 464; Mulakkkhaṣ : 22a, 26a], カンショウ [Nür I : 433-434, 469, 485; Mulakkkhaṣ : 21b], クロブ [Mujāwir : 140; Nür I : 448, 462; Mulakkkhaṣ : 20b], カルダモン [Mujāwir : 140; Nür I : 459, 464, 485; Mulakkkhaṣ : 22a, 25a], クマール沈香の葉 [Nür I : cf. 442-443, 462], アロエ [Nür I : 438, 472, 485, 490; Mulakkkhaṣ : 4a, 17b, 19b, 20a, 22b, 24b, 25a], ナツメグ [Nür I : 422; Mulakkkhaṣ : 20b], サフラン [Mujāwir : 140; Nür I : 431, 460, 465, 473, 479, 485, 486; Mulakkkhaṣ : 20b, 24b, 25a], 中国陶磁器 [Nür I : 439-440, 463; cf. 栗山 2012 : 58-59]。なお、ナツメヤシやオカヒジキ、クミン、アロエについては、イエメンからアデン港税関に運ばれ、輸出されていたとみられる記事を見つけることもできる [Nür I : 486, 490]。また、オリーブオイル (zayt) への言及は Mujāwir にあるのみだが、スミスが述べるように、本稿ではゴマ油と訳出した salīṭ がゴマ油あるいはオリーブオイルを指すと考えれば [Smith 2006 : 91, note. 589], 他史料においても記載がみられる [Nür I : 433, 472, 483; Mulakkkhaṣ : 4a, 17b, 22a, 25a, 26a]。

- 16) 東アフリカに位置する港町で、現在のソマリア連邦共和国の首都 [Taqwim : 160-161; Mu'jam V : 201; Baṭṭūta II : 115; 家島訳 III : 137-144]。
 17) 東アフリカに位置した港町。イブン・マージド Ibn Mājid (d. 15. C.) の著書に、若干の記事がみられるという [栗山 2008 : 28]。
 18) 詳細は不明であるが、ソマリアの地にある一地方 (bilād) であるという [Nür I : 445, note. 3306]。
 19) バーブ・アルマンダブ Bāb al-Mandab 海峡付近の北東アフリカに位置した港町 [Taqwim : 160-161; Mu'jam III : 184-185; Baṭṭūta II : 114; 家島訳 III : 137]。

糖も、一例だけであるが、宮廷において用いられたことを確認できる [Nūr II : 19]²⁰⁾。ただしイエメン南部山岳地域にあるジブラ Jibla²¹⁾では、砂糖の生産、供給が盛んに行われており、輸入した砂糖を使用する機会は少なかったものと考えられる。また動物性油脂については、「宮廷への食材供給記録」中ではアデン港のみがその供給元として記録されている一方で、アデン港課税品目録には関連する記事をみつけることができない。しかし、14世紀に東アフリカを旅したイブン・バトゥータ Ibn Baṭṭūta (d. 770/1368-69) が、ザイラウの動物性油脂が有名であったと報告していることから [Baṭṭūta II : 114; 家島訳Ⅲ : 137]、ザイラウからアデン港へ輸送されていた可能性は高い。

エジプトからアデン港へ到来したとみられる産物には、米があった。米は、イエメンの自然環境下では十分に生産することが難しく [Varisco 1994b : 179-180]²²⁾、外部からの輸入に頼らざるを得なかった。雑貨類のうち、塩化アンモン石やアンチモン、オカヒジキ、カシワ没食子もまた、エジプトより輸入されていた。

インド、東南アジア方面からは、米や各種香料・香辛料類が輸入されていた。米の供給元として、既述したエジプト以外に、インド洋西海岸のマンジャール Manjarūr²³⁾やファークヌール Fākanūr²⁴⁾、ヒーリー Hīlī²⁵⁾、マラバル Mulaybār²⁶⁾が『アデン港の書記官提要』に挙げられている [Mulakhkhaṣ : 21a]。香料・香辛料類は、「宮廷への食材供給記録」にある30点のうち、16点をアデン港からの供給に依存していた。このうち、コショウやウイキョウ (bisbāsa)、クミン、マスタック、肉桂、カンショウ、クローブ、カルダモン、クマール沈香の葉²⁷⁾、アロエ、ナツメグについてはアデン港課税品目録に記載があり、インドや東南アジアからもたらされていたとみられる。また中国の泉州 Zaytūn から積み出され

20) アデン港課税品目録においては、この砂糖 (sukkar maqdishī) の明記はみられない。しかしそのニスバを踏まえれば、モガディシユからアデン港を通じて輸入された砂糖と考えるのが妥当である。

21) ズー・ジブラ Dhū Jibla と呼ばれる。タイズの北東、一日行程のところろに位置する。cf. [Taqwīm : 91; Nukhba : 217; Mujāwir : 168-169; Mu'jam II : 123-124; Baṭṭūta II : 107; 家島訳Ⅲ : 128]。

22) なお、イブン・アルムジャーウィルによれば、ティハーマにおいて稲作が行われたことはあったが、継続はされなかった [Mujāwir : 63]。

23) ドゥンプ入江 khawr al-Dunb と呼ばれる、マラバル地方最大の入江に位置した港町。コショウとショウガが大量にあった [Taqwīm : 354; Nukhba : 173; Baṭṭūta IV : 40; 家島訳Ⅵ : 119-120]。

24) マラバル地方に位置した港町。他の地方にはないような、上質の砂糖きびが多くみられた [Baṭṭūta IV : 39; 家島訳Ⅵ : 118-119]。

25) マンジャールから二日行程のところろに位置した港町。中国船団 (marākib al-Sin) が来航していた [Taqwīm : 354; Baṭṭūta IV : 40-41; 家島訳Ⅵ : 120-121]。

26) インド亜大陸南西部、スィンダーン Sindān (スィンダーブール Sindābūr) からカウラム al-Kawlam に至る沿岸地域を指した。胡椒の地方 (bilād al-fīfil) と呼ばれた [Taqwīm : 353-361; Nukhba : 173; Mu'jam V : 227; Baṭṭūta IV : 35-38; 家島訳Ⅵ : 112-119]。

27) クマール Qumār は、インドシナ半島南東部、現在のカンボジア周辺を指す [Mu'jam IV : 449; Taqwīm : 369; Nukhba : 155; 家島 2006 : 513-514; 栗山 2008 : 18, note. 61]。

た中国陶磁器は、宴席や下賜において用いられたほか [Nūr II : 115-119, 125-130, 145-150]²⁸⁾、各種香料・香辛料や絹織物などとともに、マムルーク朝への贈答品としても使用された [Sulūk IV : 345; 家島 2006 : 467]。

一方、ビンロウジに関しては、マラバールやモガディシュ、ズファール Zufār²⁹⁾、スィラー Silā³⁰⁾の港が積出地として記載されている。ビンロウジは、インド洋周縁部の広い範囲において、石灰とキンマの葉とともに嘔まれることで嗜好品として使用された [Mu'tamad : 293; Baṭṭūṭa II : 127; 家島訳Ⅲ : 157-158]。また、タマリンド (thamara)³¹⁾ やサフランは、エジプトに加えて、キーシュ Kays³²⁾ やメッカ Makka から積み出されていた。

ところで、ヒヨコマメやオリーブオイル、香料・香辛料類 4 点 (配合香料やアニス、スニマーク、メボウキ) は、積出地の記述がみられない産物である。ヒヨコマメは、豆類の中では最も多く「宮廷への食材供給記録」に記載されている産物であるが、その供給元としてアデン港以外の都市名が挙がることはない³³⁾。『知識の光』中のアデン港課税品目録においてはシャワーニー税が課せられており、アラビア海を経由して輸入されたと考えられるが、その一方で紅海での交易品目が記載されているクセイル文書³⁴⁾に言及があることから [Li 2004 : 67]、エジプトから輸送されていた可能性もある。オリーブオイルについては、ウマ

28) 「宮廷への食材供給記録」中に陶磁器への言及例は枚挙に暇ないが、中国陶磁器が使用された例は宴席や下賜、砂糖菓子記録以外では確認することはできない。イエメンにおいても各種陶磁器が生産され [Nūr I : 54-55, 208-212]、ザビード産の陶磁器が「宮廷への食材供給記録」に記載されていることを踏まえれば、普段はイエメン産の陶磁器が主に使用されていたのではないだろうか。

29) アラビア半島南部、現在のオマーン共和国西部に位置する沿岸地域。乳香や馬の産地として知られる [Taqwim : 92-93; Mujāwir : 260-265; Mu'jam IV : 67-68; Masālik 158; Baṭṭūṭa II : 123-127, 129-130; 家島訳Ⅲ : 148-156, 162-164; 家島 2006 : 333-360, 568-569]。

30) 原文では、Silā [Nūr I : 446] や al-Sayli [Nūr I : 464] と記録されている。『知識の光』翻刻者のジャーズィムは、スィラー (Silā) ビンロウジを中国にあるスィラー al-Silā 地方から積み出されたビンロウジであるとし [Nūr I : 446, note. 3315], al-Sayli をスィラーン島 Jazīra Silān に由来すると述べている [Nūr I : 464, note. 3411]。なお、両者が al-Sili の誤りであり、共に中国の東方のスィーリー al-Sili を指している可能性もある [Taqwim : 366-367; Nukhba : 65]。

31) thamara は、一般的には単に「果実」を意味するが、本稿ではシャムルーフやスマスの意見 [al-Shamrookh 1996 : 317; Smith 2006 : 91, note. 598] にしたがって、「タマリンド (tamarind)」と訳出した。

32) ベルシア湾に浮かぶ島。真珠の採集場やインド向け馬の輸出港として知られた [Taqwim : 372-373; Nukhba : 160; Mu'jam IV : 565-566; 家島訳Ⅵ : 303-304; 家島 1993 : 147-175]。

33) Afḍal 所収の「庇護されたる al-Yaman における植え付け時期と課税に関する知識 Faṣl fi Ma'rifa al-Matānim wa al-Asiqā fi al-Yaman al-Mahrūsa」に、ラスール朝下におけるヒヨコマメの植え付け時期に関する記事がみられるが、宮廷へ供給された形跡をみつけることはできない [Afḍal : 27; Varisco 1991 : 17]。

34) クセイル文書とは、1978-1982年に、紅海沿岸の港町クセイル al-Qusayr al-qadim (現在のクセイルより北方 8 km のところに位置する) から出土した、数百片のアラビア語紙片のことである。商業通信文や書簡など、その内容は多岐にわたる。Li は、この文書群をもとに、13世紀の紅海における交易の状況を明らかにした [Li 2004]。

リー al-'Umarī (d. 749/1349) による「そこ (al-Yaman) には、シリア al-Shām から運ばれてくる以外に、オリーブオイルやオリーブはない」[Masālik: 154] との記事と、イブン・アルムジャーウィルによる言及 [Mujāwir: 42] をもとにすれば、ラスール朝下におけるオリーブはシリアより輸入されていたと考えられる。なお、配合香料やアニス、スニマーク、メボウキは、上述した三種類のアデン港課税品目録に記載こそされていないものの、「宮廷への食材供給記録」にはアデン港以外の供給元への言及がなく、イエメンで生産された形跡もみられない。

こうした輸入品のうち、ナツメヤシやバター油脂、ロウ、セッケンについては、アデン港からの供給事例とともに、イエメンから供給された形跡を多く確認できる³⁵⁾。したがってこれら4点については、必ずしもそのすべてを輸入に頼っていたということとはできない³⁶⁾。このように自給可能な産物を輸入する理由は、ウマリーによる「そこ (al-Yaman) では砂糖やセッケンが作られているが、エジプトやシリアにあるものとは異なる。」[Masālik: 159] という記述をもとにして考えれば、自給品とは異なる価値や必要性を輸入品にみいだしていたところに求められるだろう。

以上のように、13 世紀ラスール朝宮廷は、イエメンでは生産できない様々な食材を、エジプトやメッカ、東アフリカ、キーシュ、インド、東南アジアから輸入していた。アデン港課税品目録に記載された各種取扱品目の産地や積出地が、インド洋周縁部以外にも地中海世界やイラン、イラク、中央アジアにまでおよんでいること [栗山 2012: 58-74] と比較すれば、ラスール朝宮廷への食材供給圏はより狭く、エジプトを西端にして東方のインド洋方面へ向かって広がっていたことがわかる。この背景には、アデン港への直接の積出地がインド洋周縁部に所在しているという事情に加えて、香料・香辛料類といった宮廷の食卓に必須の食材が、この地域において生産されていたことが認められる。

おわりに

本稿では、新史料『知識の光』所収の「宮廷への食材供給記録」をもとに、13 世紀ラスール朝宮廷へ供給された食材を、インド洋交易との関わりを中心にして叙述することを試みた。

まず「宮廷への食材供給記録」より宮廷食材を抽出し、分析を行った結果、香料・香辛料類が種類数の上では全体の約3割を占めていることが明らかとなった。また米や小麦といっ

35) たとえばバター油脂についていえば、供給元が明記された事例は11例ある。そのうち、アデン港からの供給事例が3例 [Nūr I: 530, 532; Nūr II: 19]、イエメンの諸都市からの供給事例が8例 [Nūr I: 527, 530, 532-533, 542, 547, 552; Nūr II: 6, 7, 12, 19, 71] である。

36) ただし、エジプト (miṣri) バター油脂など、明らかに輸入品と考えられる産物もみられる [Nūr I: 530, 552]。

た一定の産物に関しては、その詳しい種類名までもが必要な情報とみなされていた。

さらに、これらの食材のうち、インド洋交易によってもたらされたとみられる産物の検討を行った。まずアデン港課税品目録と「宮廷への食材供給記録」とを比較し、宮廷が輸入していた食材を確定した。そして、各種香料・香辛料類や米、油脂類など、イエメンでは生産できない産物を、エジプト以東のインド洋周縁部からの輸入に宮廷が依存していたことが明らかとなった。

本稿の意義は、以下の三点に集約される。

一つ目は、従前のイスラーム世界の宮廷食文化の研究ではあまり使用されなかった、一次性の高い行政文書に依拠した点である。すなわち先行研究は、主として料理書や年代記、ヒスバの書、文学作品を一次史料に用いてきた [cf. Mahjūb 1986; 'Abd al-'Azīz 1989; Levanoni 2005; Lewicka 2011]。その点、「宮廷への食材供給記録」という宮廷の食生活に直接携わったとみられる史料にもとづいて宮廷の食材の諸相を再構成する本稿の試みには、新規性が認められよう。既述したように「宮廷への食材供給記録」の扱いには注意が必要なものの、この史料を主たる典拠とすることで、これまでにない鮮明な描写が可能になったと考えている。

二つ目は、インド洋交易で扱われた産物の、水揚げ後の行方を追った点である。これまでのインド洋交易史研究では、交易品そのものはおろか、その具体的な用途まで分析されることは少なかった。本稿における検討によって、インド洋交易で取り扱われた品目が、実際に宮廷食材として使用に供されたことが実証された。

三つ目は、様々なネットワークを交差するイエメンを支配したラスール朝が、インド洋交易による金銭面以外の恩恵を享受していたことを示した点である。これまで同王朝は、支配下にあったアデン港などにおける莫大な関税収入を得ていたことを特に語られてきた。しかし本稿でみたように、ラスール朝は、インド洋周縁部で育まれる多様な食材をも直接に獲得し、彩り豊かな食生活を宮廷に実現させていたのである。

参考文献

- Afḍal : D. M. Varisco & G. R. Smith (eds.), *The Manuscript of al-Malik al-Afḍal al-'Abbās b. 'Alī b. Dā'ūd b. Yūsuf b. 'Umar b. 'Alī Ibn Rasūl : A Medieval Arabic Anthology from the Yemen*, Gibb Memorial Trust, 1998.
- Baṭṭūta : Ibn Baṭṭūta, *Rihla Ibn Baṭṭūta*, 5 vols., Bayrūt, 1992.
- Masālik : al-'Umārī, *Masālik al-Absār fī Mamālik al-Amṣār : Mamālik Miṣr wa al-Shām wa al-Hijāz wa al-Yaman*, ed. A. F. Sayyid, al-Qāhira, 1985.
- Mu'jam : al-Yāqūt al-Rūmī, *Mu'jam al-Buldān*, ed. F. A. al-Jundī, 7 vols, Bayrūt, 1990.
- Mujāwir : Ibn al-Mujāwir, *Ṣiḥa Bilād al-Yaman wa Makka wa Ba'ḍ al-Hijāz al-Musammāt Ta'riḥ al-Mustabṣir*, ed. O. Löfgren, Leiden, 1951.

- Mulakkhkhaṣ : al-Ḥusaynī, *Mulakkhkhaṣ al-Fiṭan (Medieval Administrative and Fiscal Treatise from the Yemen: The Rasulid Mulakkhkhaṣ al-Fiṭan by al-Ḥasan b. 'Alī al-Ḥusaynī)*, ed. G. R. Smith, Oxford University Press, 2006.
- Mu'tamad : al-Muzaffar, *al-Mu'tamad fi al-Adwiya al-Mufrada*, ed. M. al-Safā, Bayrūt, n. d..
- Nukhba : al-Dimashqī, *Kitāb Nukhba al-Dahr fi 'Ajā'ib al-Barr wa al-Baḥr (Islamic Geography)*, 203), ed. A. F. Mehren, E. J. Brill, 1994.
- Nūr : anon., *Nūr al-Ma'ārif fi Nuḥum wa Qawānīn wa A'rāf al-Yaman fi al-'Ahd al-Muzaffarī al-Wārif*, ed. M. A. Jāzim, 2 vols, Ṣan'ā', 2003 and 2005.
- ポーロ : マルコ・ポーロ (著), 愛宕松男 (訳注) 『東方見聞録』 2 vols., 平凡社, 1970-1971.
- Simṭ : Ibn Ḥātim, *Kitāb al-Simṭ al-Ghālī al-Thaman fi Akhbār al-Mulūk min al-Ghuzz bi-al-Yaman (The Ayyū bids and Early Rasū lids in the Yemen (567-694/1173-1295) 1)*, ed. G. R. Smith, London, 1974.
- Ṭabsira : al-Ashraf, *al-Ṭabsira fi 'Ilm al-Nujūm (Medieval Agriculture and Islamic Science-The Almanac of a Yemeni Sultan-)*, ed. D. M. Varisco, University of Washington Press, 1994.
- Taqwīm : Abū al-Fidā', *Taqwīm al-Buldān*, ed. M. Reinaud, Beyrūt, n. d..
- Ṭawqī'āt : anon., *al-Ṭawqī'āt fi Taqwīm* ("al-Ṭawqī'āt fi Taqwīm al-Zirā'a al-Majhūl min Aṣl Mulūk Banī Rasūl [Details from an Anonymous Agricultural Almanac of the Rasulid Period]"), ed. D. M. Varisco, *Dirāsāt Yamaniyya*, 20, Ṣan'ā', 1985.
- 'Uqūd : al-Khazrajī, *al-'Uqūd al-Lu'lu'īya fi Ta'riḫ al-Dawla al-Rasūliya*, ed. M. B. 'Asal, Bayrūt, 2 vols., 1911-1914, re. 1983.
- 家島訳 : イブン・バットウータ (著), イブン・ジュザイイ (編), 家島彦一 (訳注) 『大旅行記』 8 vols., 平凡社, 1996-2002.
- 'Abd al-'Azīz, N. M. (1989) *al-Maṭbakh al-Sulṭānī Zaman al-Ayyūbiyyīn wa-al-Mamālik*. al-Qāhira.
- 馬場多聞 (2011) 13 世紀ラスール朝下イエメンにおける宮廷への食材供給元の分析 『日本中東学会年報』 27(1), 1-28.
- 栗山保之 (2008) 13 世紀のインド洋交易港アデン —— 取扱品目の分析から —— 『アジア・アフリカ言語文化研究』 75, 5-61.
- 栗山保之 (2012) 『海と共にある歴史 —— イエメン海上交流史の研究 ——』 中央大学出版部.
- Levanoni, A. (2005) Food and Cooking during the Mamluk Era: Social and Political Implications. *Mamlūk Studies Review* 9(2), 201-222.
- Lewicka, P. B. (2011) *Food and Foodways of Medieval Cairenes: Aspects of Life in an Islamic Metropolis of the Eastern Mediterranean*. Leiden.
- Li, G. (2004) *Commerce, Culture, and Community in a Red Sea Port in the Thirteenth Century*. Leiden.
- Mahjūb, S. (1986) *Wuṣṣa ilā al-Ḥabīb fi Waṣf al-Ṭayyibāt wa al-Ṭīb*, vol. 1 of 2 vols., 1986.
- Margariti, R. E. (2007) *Aden and the Indian Ocean Trade: 150 Years in the Life of a Medieval*

- Arabian Port*. The University of North Carolina Press.
- Serjeant, R. B. (1974) The Ports of Aden and Shihr (Medieval Period). *Les Grandes Escales I. Recueils de la Société Jean Bodin* 32, 207-224.
- Serjeant, R. B. (1984) The Cultivation of Cereals in Mediaeval Yemen: A Translation of the Bughyat al-Fallāḥīn of the Rasūlid Sultan, al-Malik al-Afdal al-'Abbās b. 'Alī, composed circa 1370 A. D.. *Arabian Studies* 1, 25-74.
- al-Shamrookh, Nayef Abdullah (1996) *The Commerce and Trade of the Rasulids in the Yemen, 630-858/1231-1454*. Kuwait.
- Smith, G. R. (1995) Have You Anything to Declare? Maritime Trade and Commerce in Ayyubid Aden. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 25, 127-140.
- Smith, G. R. (1996) More on the Port Practices and Taxes of Medieval Aden. *New Arabian Studies* 3, 208-218.
- Smith, G. R. (2006) *A Medieval Administrative and Fiscal Treatise from the Yemen (Journal of Semitic Studies Supplement 20)*, Oxford.
- Vallet, E. (2006) Yemeni "Oceanic Policy" at the End of the Thirteenth Century. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 36, 289-296.
- Vallet, E. (2010) *L'Arabie Marchande: État et Commerce sous les Sultans Rasūlides du Yémen (626-858/1229-1454)*. Publications de la Sorbonne.
- Varisco, D. M. (1985) al-Tawqī'āt fi Taqwīm al-Zirā'a al-Majhūl min Aṣl Mulūk Banī Rasūl [Details from an Anonymous Agricultural Almanac of the Rasulid Period]. *Dirāsāt Yamaniyya* 20, 192-222.
- Varisco, D. M. (1988) Rasulid Agriculture and the Almanac Tradition. In: Daum, W. (ed) *Yemen: 3000 Years of Art and Civilisation in Arabia Felix*. Innsbruck-Frankfurt-am-Main, 309-311.
- Varisco, D. M. (1989) Medieval Agricultural Texts from Rasulid Yemen. *Manuscripts of the Middle East* 4, 150-154.
- Varisco, D. M. (1991) A Royal Crop Register from Rasulid Yemen. *JESHO* 34, 1-22.
- Varisco, D. M. (1993) A Rasulid Agricultural Almanac for 808/1405-6. *New Arabian Studies* 1, 108-123.
- Varisco, D. M. (1994a) An Anonymous 14th Century Almanac from Rasulid Yemen. *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften* 9, 195-228.
- Varisco, D. M. (1994b) *Medieval Agriculture and Islamic Science: The Almanac of Yemeni Sultan*, University of Washington Press.
- Varisco, D. M. (2002) Agriculture in Rasulid Zabid. In: Healey, J. F. and Porter, V. (eds) *Studies on Arabia in Honour of Professor G. R. Smith (Journal of Semitic Studies Supplement 14)*, Oxford, 323-351.
- Varisco, D. M. (2010) The Milh al-Malāha of al-Malik al-Ashraf 'Umar (d. 696/1296): Situating the Ur-Text of the Rasulid Agricultural Corpus. *Chroniques du manuscrit au Yémen* 9, 2101.

家島彦一（1993）『海が創る文明 —— インド洋海域世界の歴史 ——』朝日新聞社.

家島彦一（2006）『海域から見た歴史 —— インド洋と地中海を結ぶ交流史 ——』名古屋大学出版会.

（九州大学大学院人文科学府）